

責任を持って情報を発信しようとする態度を育成する体験的実践事例の開発

Practical Study on Improving the Responsible Attitude of Communication

小川雅弘*

Masahiro OGAWA*

*浜松市立都田小学校

*MIYAKODA Elementary School

堀田龍也**

Tatsuya HORITA**

**静岡大学情報学部

**Faculty of Information, SHIZUOKA Univ

横幕 睦***

Mutsumi YOKOMAKU***

***スズキ教育ソフト株式会社

***Suzuki Educational Software Co., Ltd

小学校の情報教育が進み、ホームページ作成による情報発信の機会が増えているが、発信した情報の責任を求められたり、振り返ったりする活動が少なく、自らの情報発信の内容に責任を意識しにくい。本研究では、農業生産活動に受注生産活動を取り入れ、発注者に対して責任ある情報発信を行わなければならない学習状況を用意し、生産活動の過程や成果が、児童の情報発信に対する考えにどのような影響を与えるかを記録した。その結果、体験活動を、責任を持って情報発信しようとする態度の育成へと結びつける方法が示唆された。

<キーワード> 野外学習 情報教育 総合的な学習の時間 情報社会に参画する態度

1. 現状と課題

情報教育が進み、小学校ではホームページ作成や電子掲示板等の利用により、自ら情報発信する機会が増えている[1]。しかし、発信した情報を振り返ったり、発信した情報の内容を問われたりする活動が少なく、自らが発信した情報の内容に責任を意識しにくい。これでは、情報教育の目標に挙げられている、受け手の状況を踏まえて発信・伝達できる能力の望ましい発達や、情報に対する責任について考える[2]ことを促しにくいと考えられる。

受け手の状況に対する意識を高める場合、その発信先を限定して活動を行うことにより、相手意識や伝える意欲が高まることが指摘されている[3]。そこで、受注生産を取り入れた農業生産活動を展開すれば、発注者という情報の受け手を意識した生産過程の発信や、受け手が満足する生産物を栽培するための情報収集を促すことができ、責任を持って情報を発信しようとする態度をできるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

農業体験活動の情報発信に、受注生産活動を取り入れることによって、責任を持って情報発信しようとする態度が育成されるかを検証する。

本研究では、責任を持って情報を発信しようとする態度は、以下のような表われが見られれば養われてきたと考える。

A. 受け手に正確な情報提供できた

B. 受け手が満足する成果物を提供するために必要な情報を収集することができた

3. 研究の方法

(1) 「都田ダッシュ村」[4] [5] [6]で活動している、5年生19名を対象にした。受注側の相手は、同じ中学校区の小学校と他県の小学校とし、発信の内容を記録するためにWebページと電子掲示板を用意した。

(2) 受注前と受注後の子供たちの活動の様子と、作文の記述内容を調べた。

4. 結果と考察

A. 正確な情報提供を行ったかについて

受注前には、相手を意識して記述していると思われる文が104文中32文に見られた。しかし、相手が特定できていない段階であったので、抽象的な相手意識であった。受注後には、相手を具体的に意識して記述するようになったと思われる文が、138文中81文見られた。

相手を意識した記述内容の内、図1に見られるように、「気に入られるような野菜を作りたい。」と言った、相手からの評価を意識した記述は、受注前には32文中7文(21.9%)であったが、受注後には81文中66文(81.5%)見られた。

受注後の記述には、「野菜の様子を積極的に見に行ったり、掲示板にも自分から書いたりしました。」とか「今の都田ダッシュ村の様子や都田ダッシュ村で起こったことを伝えていって」と言った相手に情報を伝えようとしている記述が66文中8文見られた。

画像掲示板でも、「さといもの葉は、ますます大きくなり約80cmぐらいまでにもなりました。」と言ったよ

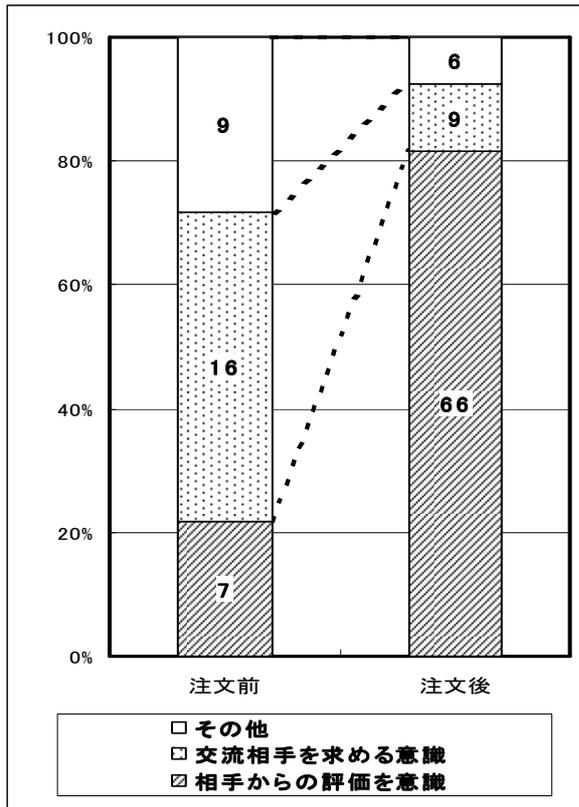


図1 相手を意識した記述内容の変化
うに、画像で伝えるだけでなく、数値で表すなどの記述が見られた。また、毎週の観察の様子を画像掲示板を利用し発信するようになり、特に、受注後は注文者への発信を意識して行うようになった。

相手を意識していないと思われる記述は、受注前には104文中72文、受注後には137文中57文見られ、その内容も、実際に活動した内容の報告などに関する記述へと変容していた。

B. 受け手が満足するための情報収集について

受注前には、学校の時間外に活動場所へ行き観察や世話をしている子供は、24日間で19名中8名であったが、ほとんどが1回の訪問であった。受注後には繰り返し訪問するようになり、新たに2名の子供も行くようになった。また、1名の子供は毎日登校前に行き、草取りや倒れている野菜があると直すなどの世話をするようになった。

相手からの評価を意識している記述の中で、情報収集についての記述は、66文中16文見られた。育て方や植え方などで不明な点があった時に、本やインターネットで調べるだけでなく、実際に栽培している家の人に聞いたり、他の畑の様子を観察したりと多様な情報収集の様子が見られた。また、栽培グループ毎に相談し、自分たちが栽培している

野菜の様子を交換したり、どんな世話をしているか、集めた情報を交換したりするようになった。

5. まとめ

これらの結果から、農業生産活動へ受注生産活動を取り入れたことが、次のような効果をもたらしたと考えられる。

- ・注文相手に満足してもらえる作物を作りたいという意識を高めた。
- ・相手に満足してもらえる生産物を栽培するという目的意識が高まり、経験者から栽培方法を聞いた、グループ間での情報の交換をしたりと多様な情報収集活動を促された。
- ・電子掲示板を利用した定期的な発信を促された。

このように体験活動に、受注生産活動のような依頼される活動を取り入れることが、責任を持って情報を発信しようとする態度の育成を促すことが示唆できた。

なお本研究は、平成14年度第11回上月情報教育財団研究助成によるものである。

参考文献

- [1]小森竜也, 藤森祐一(2002), 義務教育を対象とした個人情報保護教育に関する研究, 日本教育工学会第18回全国大会論文集pp499-500
- [2]文部科学省(2002), 情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～
- [3]中條敏江, 中川一史, 堀田龍也(2002), 相手を限定した交流学习での相手意識に関する情報活用の実践力の影響, 全日本教育工学研究協議会全国大会研究発表論文集pp279-282
- [4]都田ダッシュ村Webページ,
<http://project.suzukisoft.co.jp/dash/>
- [5]小川雅弘, 堀田龍也, 山田智之, 森下誠太, 村上守, 仲林裕一, 横幕睦(2002), 野外体験活動を促進するライブカメラ・センサーの学習利用, 全日本教育工学研究協議会全国大会研究発表論文集pp819-820
- [6]Tatsuya Horita, Takeharu Ishizuka, Masahiro Ogawa, Tomoyuki Yamada, Kazuhisa Iyoda, Mutsumi Yokomaku(2003), Live Technologies at School Rice Field-LiveCameras and a Live Sensor to Promote Student' Study through Experience, Proceedings of ED-MEDIA 2003, pp.2825-2832